
モラトリアム ~未熟な感情の中学生達~

イシュキック

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モラトリアム～未熟な感情の中学生達～

【Zコード】

Z5226D

【作者名】

イシュキック

【あらすじ】

「ぐぐぐ普通の学校生活を送っている佐野叶汰は中学3年生。小学3年の頃に記憶を失つて以来は、自分なりに満足した中学生活を送っている。そんな彼らの普通であり、楽しくて、たまに不思議なことが起る青春を描いたストーリー。

プロローグ（前書き）

本当に普通の学校生活を書いてるかと思えば、実際にはありえない
ようなことを書いたりもしています。

そのようなことを不快に思つ方は、見ないほうがいいかもです・・・。

各キャラの境遇やプロフィールなんかは、作中で紹介されていきます。隅々まで読んで、それを理解して、より楽しく想像していただければ幸いです。

プロローグ

しんと静まり返った病室で、彼女は5月の葉桜をじっと見ていて。しかし、彼女の眼にはもうわずかな光しか見えない。だが、彼女はずっと病室の窓から外を見ていた。

物心ついた時には、すでにこの病室のなかにいた。この病を治したい。楽しかったはずの幼い日にもう一度戻りたい。此処に来る前の場所へもう一度戻りたい。

そう願いながら彼女は今日も外を見続けていた。

・・・

背後に人の気配がする。

母さんかな？

泣いてるのかな・・・?

ダメだ、もう耳もあまり聞こえない・・・

? ? ? 「・・・よ」

女の子 「え?」

女の子が振り返ると、ぼんやりとしているが、母ではなく一人の男の子が立っていた。

「え、つと？」

俺は一人。ここは、京都。んでもって今は5月。俺の名前は佐野叶汰。^{さの キヨウタ}つい先刻まで、何人かの友達と一緒に騒いでたはず。ところが、今は一人。簡単に言つてしまえば、学年全体で修学旅行に来たのだが・・・置いて行かれた。

まわりの通行人達 「ザワザワ・・・」

俺はさみしがり屋でも何でもないが、やはりこんなにたくさんの人の中に一人でいるのは悲しくなつてくる。

そうだ、元はと言えばあの馬鹿教師の数え間違いが原因だろう！まあ、そこのベンチにでも座りながら一応昨日の夜から今までの経緯を思い出してみよう。

5月【 // サンガと記憶】 1・回想（前書き）

この回は、主人公（一応）の友達の紹介となっています。

5月【ミサンガと記憶】 1・回想

「ここは某ホテルの一室だ。昨日の夜、俺達はクラスで仲の良い？男子3人女子3人でトランプをしていた。ちなみに、最初の種目はポーカーだった。理由は

「そりやあ・・・ほら、大人数でトランプやるつて言つたらポーカーじゃない？ねえ？」

と、クラスの女子の中でもリーダー的存在であり、クラスの委員長でもあり、また俺達男子3人の共通の友人である「水屋 晴」が、誰に問いかけるわけでもなく発言したからである。この水屋だが、なかなか美人である。身長は160ジャスト。体重は聞いたことが無いが、なかなかいい体つきもある。しかし、少々性格に難ありで、人の秘密を探つたり、どんな男子とでも必要以上に喋るので、俺は少し苦手だ・・・良く言えばだれとでも仲良く接することができるってことなんだが。まあ、そんな感じのやつだ。

「んじゃ、やろーよ！」

と、エブリヴァーデイが意見を言つ前にちやつちやと配り始めたこの女子が、「神下 真琴」だ。身長は161ぐらいだろう。そしてスマート。ちなみに、今部屋の中にある女子の中で俺が一番信用できる女子だ。理由は、中性的な外見のため、女子とアツチ系の話をすることが少ないから。もちろんそれだけじゃなくて、その明るい性格と親切さも理由の一つだ。向こう見ずな所もあるが・・・本人によれば、女子からラブレターをもらつたことも何度かあるとか無いとか。うらやましーぜ！。さて、配り始めて数秒後・・・

真琴 「あれ！？今何枚ずつ配ったんだっけ？」

「4枚」

「5枚」

と口をそろえて違う答えを言つたのが、「新田 未来矢 & 末早矢」の双子姉弟である。身長は2人とも155程度だろう。体系は普通。

未来矢が弟、未早矢が姉。この双子、驚くことに一卵性双生児で顔が一緒である。たまに入れ替わってイタズラをするのは「デフオ」だ。クラスの女子の話では二人ともカワイイ系らしい。まあ、俺達男子3人の中では未来矢が一番モテてるからな。納得。未来矢は天然が入ってると思う。未早矢は腹黒……って程ではないが、毎回のいたずらの首謀者だ。普段は未早矢が髪の左側をピンでとめたりしてるのですぐ分かつたりする。いや、それを未来矢がやると俺は騙されるんだが……

「どつちだよおまえら！ つてかポーカーって何だよっ！」
と、大声を張り上げたのが野球部のファーストの「村野 豪」だ。
この中で1番頭が悪い……と言っちゃなんだが、賢くない？ 力は
強くて、右手でリングゴジュースを作れる程度らしい。（どうでもい
いが）身長は178、体重は75。俺より10cmも高い。つてか
おまえポーカー知らないのかよ！

未早矢 「教えてあげようか？ 豪ぐうくん。ポーカーと言つのは、
ハートの3が手元に回つたら『ポーカー！』って大声を裏声
で張り上げるゲームなんだよ？ わかった？」

豪 「んなわけねーだろ！」

そりゃいくら豪でも信じるわけねーわな？ 真琴も笑いをこらえてる
し。

みんながカードをとつた。えーっと……あ、いきなりクローバー
が揃つてやがんの。ラツキ！

豪 「ポーナー・ツーカー・ア・ゲホッ！ ムツ！」

なんという強運……ハートの3がまわってきてたか。つてか裏声
出せてねーし。

豪 「こ、これでおれの勝ちか？」

晴 「私3枚チエンジ！」

俺 「俺チエンジなしで。」

真琴 「私もしないでいいやー」

真琴のやつ顔に出てるぞ、ニヤニヤしちゃって……ホンシト分か

り易いやつだなあ。

未早矢 「2枚チエンジでー」

未来矢 「左に同じ。」

未来矢の左隣は未早矢だ。

豪 「あれ？ チェンジってなに？ ··· ねえ ··· ちょっと叶汰さん？ シカトしないでよ。」

あ、俺の左隣は豪だつたか。鬱陶しいからしつかり説明してやるか ···

俺 「至極簡単に説明すれば、同じ数字を揃えたりペアを作つたりする。んで、チエンジは1回ね」
うん。俺にしてはまともな説明。

晴 「佐野はＫＹ王佐野の称号をGETした。」

はははは！『めんなさい ···

5冊[ミサノガと記憶] 1・回想 その2

豪　「じゃあ、俺は4枚チエンジだ！」

未早矢とせその1枚はハトの三たてで

・ ひせが計画

さて、みんながチーンジし終わつたといひで、シヨウダウン一

俺
-俺
フラッシャー

正義の爲めに死んでいた。」

流石は未早矢。何だかんだ言つて負けないな。

未来矢
ースリー カード・・・負けたかな?

「今、どうして、アリスがここにいる？」

みんなの耳が一斉に鳴らしへ。

豪 「フルハウスとかストレートとかなんだよ」「ノヤロー！ビーセ

「へアなんて何もねーよー！」

•
•
•

7
ああ
冗談だろ?

卷之三

「マジ? 良かつたね豪! ハートの3があつて

豪
「お！、なんだ？ハートの3持つてたらやつば勝ちか？」

眞跡
卷之二

つてなわけで、ポーカーは1回きりで終結

つてなわけで、ボーカーは1回きりで終わつた。次はまたもや晴の提案により、大富豪をすることとなつた。

そして、その5ゲーム目に末早矢が

未早矢 「ねえ？このゲームで一番の人がドンケの人罰ゲームを執行しよう？」

恐ろしい

恐ろしい・・・未早矢が勝つたら何をやらせれる!』とやら。

「まともな人で良かつた。」

卷之三

豪 - まともじゃなしで俺のことかよ!「

「あら、どうも、おまえが、首痛つた。」
「あら、どうも、おまえが、首痛つた。」

真琴一罰ゲ

『まいたいぐらい恥ずかしい言葉を叫ぶ』ってのはどうだい？』

「 そりかな？ でも、 こんぐらいやんなきや 燃えないと しそつ

1

なるほど。そりやおもしれえ。そしてこつから2位のドンケを決め
る戦いが行われた。そして、最後に残ったのは豪と晴！流れ的にい
えば豪！だが、豪には切り札があった。

んな！？ 賢さう割増しか！？ ああ・・・ 豪のカード3が2枚だよ。
しかもひとつはハートだし。

晴
二
卷之二

晴のカードは2とエースしかない・・・決まつたな!

10

「わあ、晴一がーんと云ひじやつてー。」

晴がベランダに出た。ちなみにここは3階。正直俺は、晴がどんな

つてかみんなしてるだろうけど。

豪 「早く言えよ～！晴う～！」

豪は超上機嫌だ。勝ったのがよっぽど嬉しいらしい。

そして・・・

晴 「スウウウ…」

「キヤアアアア！豪にお尻触られたああ！！！」

おお・・・エコーが聞こえてくる程でかい声だ。

未早矢 「うつわあ～！！！超恥ずかしいじゃん！？やつば――――――！」

未来矢 「あはっ！豪ドン引き～」

豪 「ちょっと待てよおっ！これじゃ俺が恥ずかしいだけじゃねーか！」

真琴 「じゃあ、豪が「ウオオオオオ～」晴にケツ触られたアアア～！」

つて叫べば？クヌツ

一同 「アハハハハハハ！！！」

しかし、晴が大きな声で叫びすぎたらしく、下の階や隣のベランダまで開きだした。ついには、下の階からティーチャーの怒鳴り声と思われる声まで聞こえてきた。

晴 「っちやー・・・マズ・・・」

俺 「電気消して布団の中に隠れようぜ～～～」

一同 「りょーかい！」

ガサゴソ・・・

布団にかくれながら思つたが、男女一緒に部屋にいる時点で規則違反なんだよね。まだ中学3年だし。こりや見つかつたらヤバいぞ。

5月【ミサンガと記憶】 1・回想 その3

5分後。

コンコン

・・・・

ノックの音がした。ついに来たか。皆、息を殺す。

コンコン！

鍵はかけてないから、そろそろ入つてくれるだろ？。

コンコン・コンコン・コンコンコンコン

真琴 「 プツ」

未早矢 「 しーっ」

吹いた真琴に小声で注意する未早矢。だが、こんな訳のわからんことをするティー・チャ―が、もう誰だが俺にはわかつた。

ガチャ

????「 やあ～まのほとりいいのおおRRR みどりにしげえる
うつうう」

そうだ。今校歌を唄いながら入ってきたこの人こそ、俺たちの担任の「坂木幹彦（さかきみきひこ）」だ。・・・やつた。マジラッキーだ。幹彦Tなら俺達が指導されることも無かる。つてか校歌を歌つてるとか大分酔つてやがんな。

一同「 ・・・良かった・・・」

みんなで勢いよく布団をはいで、電気をつけた。

幹彦 T 「おまいら～！こんな夜中で大声で叫ぶとは・・・先生嬉しいぞ」

だめだ、狂つてやんの。

未早矢 「ハイハイ！センセー！おつまみあげるからとつと帰つてください！」

と言いつつ、豪の鞄からイカの燻製をとりだした。

幹彦 T 「おおおお！流石は新田だ！わかつてゐるじゃないか

豪 「先生！それ俺のです！！！」

幹彦 T 「じゃあなおまえらつてよ～お年を～～～」

豪 「だから先生！それお

バタン！！

つまみがほしかつただけ！？

未来矢 「ハハハッ！今は5月なのにねー」

晴 「酔つ払いすぎでしょ～」

豪 「ああ、俺が野球の次に大切にしていたものが・・・」

俺 「豪・・・わけわからんけど元氣出せよ。」

未早矢 「続きやろ～！・・・といきたいところだけど、今度別の先生が来たら本当にヤバいね。」 晴 「どうしようか？」

そんなこんなで、また布団の中にもぐりこみ電気を消して、今度はみんなで語ることにした。

•

「痛つ！ 真琴ア、髪の毛踏んでる。」

真理の傳道者

時はロングヘアーだから才媛そんが、さてかさつきから右側で枕枕
系のイイ匂いがすると思ったら右隣が真琴だったのか。癒される。
・・・左隣は？？何故か温泉の硫黄のにおいのする豪一おーーーー
の温泉は硫黄は含まれてたつけ？まさか・・・

つた。

どんなことを語つたかと言うと、小学1年生の終わりに、未来矢と未早矢が俺の家の隣に引っ越してきたことを未早矢まず言つた。そして、俺が小学3年のはじめに事故にあって、記憶喪失になつたことを未来矢が話した。ちなみに俺は今でも小学3年以前の記憶がない。その話で場がしんみりしてきた。しかし、豪が俺に小学4年のころ野球で負けて、そのあと俺にむかつて「弟子にしてください!」と言つた。みたいな話を豪がしだしたら、また場が盛り上がりつきてきた。

つまり、俺達の小学校時代の話を語つてただけなのだが、中学校から知り合つた真琴と晴には興味深い話もあつたらしく、熱心に聞いていた。そして、夜中の1時すぎになつた。

真琴

おい 真理尋てる子

そういう末早矢ももう眠そうなのだが。まあ、とりあえずどっちにしろ真琴を起こさなきやいけないので、真琴の鼻をつまんでみた。

ハア・・・・・・

俺 「駄目だ、起きまへん。」

未来矢 「口もふさいでみたら? クスツ」

つまり俺に殺せと?

晴 「しかたないね、真琴も寝ちゃつたしそうそろお開きにしようか!」

俺 「そうだな。」

つてなことで、晴が真琴を起こし、寝ぼけながらも女子3人は自分の部屋に戻つて行つた。さて、男子3人になつたさみしい部屋で、豪だけがシーンとしている。

未来矢が豪の鼻をつまんでみた。

豪 「な、にすんだ、お」

・ ・ ・ 起きてた。まあ、2人はほつといておこひ。んじや

俺 「おやすみー。」

5月【 // キンカと記憶】 1・回想 やの5（前書き）

1・(1部) 最終話です。長いです。

•
•
•

「痛つ！ 真琴ア、髪の毛踏んでる。」

真理あらば

晴はロンケヘアーだから大変そうだ。さてかさつきから右側で柑橘系のイイ匂いがすると思ったら右隣が真琴だったのか。癒される。・・・左隣は？？何故か温泉の硫黄のにおいのする豪！おい！こここの温泉は硫黄は含まれてたつけ？そんなことを考えている間に、語り。つまりおしゃべり大会が始まった。

どんなことを語つたかと言うと、小学1年生の終わりに、未来矢と未早矢が俺の家の隣に引っ越してきたことを未早矢まず言つた。そして、俺が小学3年のはじめに事故にあって、記憶喪失になつたことを未来矢が話した。ちなみに俺は今でも小学3年以前の記憶がない。その話で場がしんみりしてきた。しかし、豪が俺に小学4年のころ野球で負けて、そのあと俺にむかつて「弟子にしてください!」と言つた。みたいな話をしたら、また場が盛り上がってきた。

つまり、俺達の小学校時代の話を語つてただけなのだが、中学校から知り合つた真琴と晴には興味深い話もあつたらしく、熱心に聞いていた。そして、夜中の1時すぎになつた。

真言宗

未早矢 「いたずらしちやえ」

そういう未早矢ももう眠そうなのだが。まあ、とりあえずどっちに

俺
「駄目だ、起きまへん。」

未来矢 「口もふさいでみたら? クスツ」

つまり俺に殺せと?

晴 「しかたないね、真琴も寝ちゃつたしそろそろお開きにしようか!」

俺 「そうだな。」

つてなことで、晴が真琴を起こし、寝ぼけながらも女子3人は自分の部屋に戻って行つた。さて、男子3人になつたさみしい部屋で、豪だけがシーンとしている。

未来矢が豪の鼻をつまんでみた。

豪 「な、にすんだ、お」

・・・起きてた。まあ、2人はほつといておこう。んじや

俺 「おやすみー。」

次の日の朝、起きたら7時半。起床時間ぴったりだった。頭がまだボーッとする。昨日寝付いたのが2時過ぎてたせいかな?

未来矢 「うーん・・・うー・・・・」

未来矢がうなされてる・・・?どうしたのか見てみると、見事に豪の図太い足の下敷きになつていた。しかも豪の寝相が悪いんじやなくて未来矢が豪の布団に入つてる!?

5分ぐらいそれをじーっと見ていたら、頭も少しさはスッキリしてきた。俺は2人を優しく蹴り起こして、それから昨日の女子3人と合流し、朝食を済ませてからホテルを出た。

今日の予定は修学旅行最終日なので、9時から12時まで自由行動。12時までに、クラスで決めた集合場所に行き、そこからバスとか船で帰還。というものだった。俺達6人は、昨日のうちにお土産とかは買つていたので、メチャクチャ大きくて、いかにも都会的なゲームセンターで時間をつぶすことにした。

真琴 「私、あのダンスのゲームやってみる！」

そう言つて真琴が指さしたのは、俺達の住んでいる地区のゲームセンターにはないような、大型のゲームだつた。普通初めての人にはこういうのはできないんだが、真琴は反射神経とか運動神経がハンパじゃないうえにダンス部だつたから、かなりサマになつていた。

晴 「スッゴー！かつこよすぎ！」

真琴 「へへ・・そんな事無いって」

イヤ、マジですげーんだけど・・・

そんな感じでいろんなゲームを6人でやつていつた。豪がパンチングマシーンを破壊したのはここだけの話だ。

俺は音楽系のゲームが結構得意だつたりする。そのゲームセンターはクリアし続ければ、ワンコインでいくらでも遊べるゲームがあつたので、それをしていた。あと2曲で記録を更新と言つところで、未早矢達に話しかけられた

未早矢 「私たち眠くて気分悪いから、先にバス行つて寝とくね～。」

まあ、確かに昨日あれだけ夜更かしすれば気分も悪くなるだろ。

俺 「わかった。俺は自分の地図見てバスまで行くから先行つといで。」

未早矢 「ふあ～あ・・・んじゃおやすみ～・・・記録更新ガンバツテ！」

俺 「あれっ！？みんな行つちゃうのー？」

と俺が言つた時には、未早矢達の姿はなくもう次の曲が始まつていった。確かにいつもは元気な晴も眠そだつたし、真琴もダンスの後ボーッとしてたな・・・。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

俺 「よし！記録更新！」

そして、俺はゲームをすぐにやめて・・・外に出てカバンから地図を探した。

・・・

・

・

・

・

・

ない。ない。

そうだった！一昨日豪に貸したままだつた……あ～～～！！！終
わつた～！！！

そして、12時が過ぎた。結局バスの時間には間に合わなかつた。
というよりゲーセンをでたとこから一歩も動けなかつたと言つたほ
うが正しい。あの5人の中の誰かが迎えに来るとか期待してたから
だ。多分バスの席でおれの周りにいる予定の5人は、バスの中でぐ
つすりで気付かなかつた。そしてたぶん幹彦Tは、

「1・2・3・4・5・6・7・8・9・10・12・13・14・
14・15・17・・・・」

つてなふうに数え間違い。授業中にもよくやるしな・・・どんだけ
だよ！よく教師になれたな！？

こんな感じで俺は置いていかれると仮定する。ハハハハ！

そんなことを考えながら、少しその場を移動して、今ベンチに座つ
ていると言ひ訳だつた。

5月[//サンガと記憶] 1・回想 その5（後書き）

次からは、5月[//サンガと記憶] 2・出会い です。

5冊[// オンガと記憶] 2・出金ご（前書き）

2部スタートです。

5月【ミサンガと記憶】 2・出会い

俺 「はあ～・・・・」
多分、目を覚ましたあいつらが、俺のことに気付いて幹彦丁に言つ
てくれるとおもうんだけど。いつになるかわからないしな～。つて
なことを延々と考えながらベンチで俯いていた。

ふと、顔をあげると、そこに、1人の女子が立っていた。そしてベンチに座っている俺のことをじっとみていた。まさか、この女子もおいていかれたのか！？と一瞬考えたが、こんな女子はみたことがない。それにしてもこの子、美人でかわいい。色白で、少しやせ気味で・・・守つてあげたくなるタイプだな。あ～・・俺の思考ドン引きやわ～。・・・・・・・・

は！いかん。こんなにじつと見てたら変な人だと思われてしまつ！

女子 「あの～？」

俺 「へ！？お、俺？？何でしょうか？」

女子 「おひとりですか？」

俺 「う、うん。そうだけど・・・」

やべ、こういうタイプの女子と喋るのは初めてだから緊張する。どもりまくりでかつこ悪いな・・・俺。まあ、うちのクラスの女子にも晴みたいな美人はいたりするけど、そこは慣れというやつ。つてか俺、なんで話しかけられたんだろ。姿勢は普通ですよ！？
女子 「私、ここ来るの初めてなんで、ご一緒していいですか？」
ああ、そういうわけね。

つて・・・は？　ちょ、マテ。夢か？現実か？こんなのも初めてだ。

俺 「え？どーいう意味でしょうか？俺・・・だよね？」

女子 「あ・・えーと・・・私も1人で寂しいから、一緒にあそんでくれないかなーって・・・」

と、少し顔を赤らめて言つた。ダメだ。この顔で俺ノックアウト！
俺は知つてゐる人なんか誰もいるはずはないのに、周りをキヨロキヨ
口してから

俺 「俺でよければ。」

まあ、冷静に考へると、何で俺なのか？とかいうことになるが、こ
の子がかわいいからどうでもいいや！・・・これが男といつもので
す。

女子 「アリガトウゴザイマス！」

と、彼女は満面の笑みで言つた。断らなくてよかつた。俺は彼女
をベンチに座らせて、とりあえず名前やら、どこに行きたいかを聞
くことにした。

女子 「私、若葉わかばって言います。これからは・・・と言つても今日
1日だと思いますが、名前で呼んでくださいね！」

俺 「若葉・・さん？俺は叶汰。」

若葉 「あ、呼び捨てでいいですよ？私は叶汰クンって呼びますね。」

俺 「え？ああ・・・じゃあ、わ、若葉。」

ああ～！俺何緊張してんんだ！情けね～！～！

若葉 「はい」

俺 「どこに遊びに行きたいの？」

普通は男のおれがエスコートするもんだけ、俺は学校でのメン
バーとつるんでるだけあって、他の奴らが行きたい所についていつ
てるだけだから・・・そういうのはワカラん。だから、あえて聞く
ことにした。

若葉は数秒間考へて・・・

若葉 「ゆ・・・」

俺 「ゆ？」

若葉 「遊園地！」

恥ずかしそうに言つた。別に恥ずかしくないんじやないかな・・・
まあ、いいや。俺はできるだけさわやかな笑顔を作つて

俺 「わかった。地図があるから」れの中から選ぼう?「

俺はポケットから地図を出した。

・・・

は?地図?あ~~~~~!!!!!!そりだつた。豪に貸したあと、なかなか戻つてこないから、未来矢に借りたんだった。なんてこつた!

若葉 「どうかしました?」

俺 「いや、ハハハ・・・実はね。」

俺は今までの経緯を若葉に話した。

若葉 「そんな話、聞いたことありません・・・。すこく大変でしたね~。でも、私は嬉しいです。そのおかげで、いつもやつて叶汰クンと遊べるんだから。」

ああ・・・嬉しそう。これが夢だとしても、その日の朝の目覚めは最高だらう。実際現実なんだが。

そんなこんなで、俺達は京都にある中くらいの大きさの一般的な（観覧者とかメリーゴーランドとか「ヒーリング」とか……がある）遊園地に行くことに決めた。決めるついで色々と話すうちに、若葉の敬語は無くなつた。これは、警戒心が解けたつてことなのかな？そして、着いた。案外大きかつたので若葉は少し驚いていた。俺は、修学旅行のお小遣いがまだかなりあまつていたので、男としての尊厳を保つために？おじることにした。

俺 「俺がおじるよ。」

若葉 「えっ！そんなの悪いよ～。」

俺 「俺も男だ。おじさせてくれ。」

若葉 「アハハ 訳わからないけど、じゃあお願ひしますっ！」
ほ・・・ 訳わからないとか言われたような気がしたけど、おじれてよかつた！

入場したのはいいが、かなりたくさんアトラクションがあるみたいだな。

俺 「まず何にのる？」

若葉 「ジンギスコースター？」

俺 「う・・・」

若葉 「まさか、苦手なの〜？」

俺 「いやいや！大丈夫に決まってんじゃん！・・・多分。」

実は、小学5年の時に乗ったのが最後なんだよね。しかもメッシュ怖かったし。そして乗る。

・・・・・・・・・・・

俺 「案外楽しいじゃん？」

若葉 「うんっ！」

若葉は「うんっ」のは得意らしい。

そういうえば、さつきからすれ違う若者がたまに振り返る。理由は大体分かる。若葉は一般的にカワイイ。そして、そんな子が男の俺と一緒に歩いてるから、デートと間違えられてる。ん、妬まれてる？なんかいい気分でもあるし複雑な気持ち・・・

そして、その後2アトラクションぐらいまわったところで、若葉が『いいもの』を見つける。

若葉 「これ、行こ!？」

遊園地のお約束『お化け屋敷』。

俺 「もちろんOK!」

俺はこんな作りものなんかを怖がるほどの男じゃありませんから。でも、若葉はちょっと怖そ�だ。

入場口は、いかにもつて感じの作りだ。中に入つてみると、ギリギリ先が見えるぐらいの暗さだった。

俺 「足元気をつけろよ。」

若葉 「うん・・・・・・ひ！・・・・

俺 「どうした?」

若葉 「足にブヨッ・・・つて。」

俺は手探りして拾つてみた。

俺 「プツ！ ただのコンニャクだよ」

若葉 「な、んだ！ もおー、笑わないでよ！」

表情はあんまり見えないけど、多分笑つてる。

その後も、ボロチョウウチンやら、コンニャクの襲来が多数あつたが、若葉がたまに悲鳴を上げるだけで、俺は全然驚きもしなかつた。

俺 「これじやお化け屋敷じゃなくて『おバカ屋敷』だな」

若葉 「そんなこと言つてるとバチがあたるよ。」

そして、入場してから3分ぐらいいたつたころ

・・・ドンッ！

俺 「いてっ」

何かにぶつかつて・・顔を見るとその顔は・・・ライトで照らされて・・・

俺 「をおおおおおー！」

若葉 「きやあああー！」

・・・・・・・・・・・・

その後はダッシュで逃げたからあんまり覚えてない。俺が悲鳴を上げた理由？それは、そのお化け（ゾンビ）の顔が、豪の寝顔にそつくりだつたからさ。

若葉 「あ～れ～？？？」
叶汰クン「ビビッてるじやん？」

俺 「いや、親友に再会してしまって。」

若葉 「はい？」

俺 「気にしてくれ・・・」

そのあと、若葉からなんどか頬をツンツンされながら笑われた。いや、あれはシャレにならないって。ウチの学校の女子なら氣絶してるぞ。なんか血い噴き出してたし。

その後も、いくつかアトラクションをまわった。閉園時間も近くなり、俺達が最後に選んだリアクションが観覧者だ。あたりは夕暮れの光でほのかに赤くなっていた。

乗り込むと、俺達は向い合わせで座った。

5月【 //サンガと記憶】 2・出会い やの3（前書き）

2部終了です。

物語の起の部分終了了？

俺は改めて若葉の顔を見た。白い肌が夕焼けの赤に染まつていて、なんというか・・・・芸術的だった。やっぱり若葉には、まわりの女子とは違った魅力がある。多分。半分ぐらいの高さになつたところで若葉が口を開いた。少し悲しそうな顔で。

若葉 「今日、すゞく楽しかった。」

俺 「俺もだよ。」

若葉 「もう、帰らなきやね。」

俺 「・・・うん」

そうだった。時間的にもつ俺は、駅のところまで行つておかないといけない。あまりクラスの皆を心配させすぎるのは良くない。多分T(先生)やらが学校側で決めた集合場所で待つてるはずだ。本当に今現在の出来事が、夢のように感じた。

若葉 「実は・・・私ね。」

また若葉が口を開き始めた。

若葉 「なんでここにいるかが良くわからないの。」

俺 「は?」

若葉 「気づいたら、叶汰クンの前にいたんだよ?」

俺 「・・・」

俺は本当か「冗談か聞いただそ」とした。しかし、その前に若葉が

若葉 「なんてねつ 「冗談だよ!」

と言つた。それは丁度、観覧車のてっぺんに来た時だつた。眩しくて良く見えなかつたけど、若葉は涙目だつたような気がする。理由は、わからない。俺のせいかもしれないし。

そして、若葉は俺の隣に移動してきた。少し観覧車が斜めになつて驚いたけど、心臓の鼓動が大きくなつてゐるのはそのせいじやなかつた。ほのかにいい香りが漂つてくる。理由はわからないけど、懐かしいような気がする。なんだか暖かくて眠つてしまふそうだ。

・・・・・

それから観覧車の乗り降り口につくまで俺達は2人とも無言だった。それは、遊園地を出ても同じだった。

わからない。この気持ちがなんなのかはわからない。会話のネタ切れつて訳でもないし、ただ、なんか喋っちゃいけないような・・・

・・・・・・・・・・・・

若葉 「着いちゃつたね」

俺 「・・・・うん。」

夕日がもうすぐ沈もうとしていた。さっきよりもっと眩しかった。ここは大通りから外れた人通りが少ないところだった。

若葉 「今日は、本当にありがとう！」

俺 「俺のほうこそ」

若葉 「バイバイ！叶汰。」

俺 「うん。じゃあね」

俺は、自分のできる精一杯の笑顔で見送った。そして、若葉は俺に背を向けて駆けだした。

俺 「あ・・・」

俺は手を伸ばして、若葉にもう一声かけようとした。しかし、若葉は俺の視界から消えて、街の大通りの雑踏の中に消えていた。俺は、また、会えるかな？なんて聞こうとしてた。

なんだろう。1日だけだったのに。そりやあ外見の魅力と言いつもあるけど、違う。そうじゃない・・・やっぱりわからなかつた。ただ、寂しいだけだつた。

俺が集合場所のベンチに腰かけて10分ぐらいしたころ、聞き慣れた声が聞こえてきた。

「きょ―――た―――!――!――!――!――!――!――!――!――!

真琴の声だ。すごいスピードでこっちに走つてくる。さつきまで考えていたことやら寂しさがふつとんだ気がした。

真琴 「ハア・・・ハア・・・よ・・・良かつたあ・・心配したんだよ・・・」

どうやら俺の無事を心から喜んでくれて いるらしい。

それに続くよし、みんなが来た。あの5人と、幹彦Tだ。教師はもちろんのこと、仲のいい友達まで一緒に連れてきてくれるところが幹彦Tらしいな。・・・ん？4人だ。豪がない。

幹彦T 「佐野！すまんかつた！しかし、おまえも悪い。」

俺 「ごもつともで。」

俺達はバス停前歩いて行くことにした。

未早矢 「・・・それでねー！真琴がヤバかつたんだよー！涙目になってたし。」

未早矢が意地悪っぽく笑いながら言った。

真琴 「だつて、本当にビックリしたんだよー！」

未来矢 「そう言つ未早矢こそ、警察とか消防車とか訳のわからなこと叫んでたけどねー」

未早矢 「う・・・」

俺 「そういうや、豪は？」

未来矢 「寝てたから置いてきた。」

二コニコしながら未来矢が言った。

真琴 「寝言でお化け屋敷がー・・・とか言つてたよ。ハハハ」

俺 「ブツハハハ！マジかよ！？おまえらひでー！」

（ん？お化け屋敷？まさかな・・・）

その後も、みんなで爆笑しながらバス停まで歩いた。俺はこの時だけ、若葉とさよならした時の訳のわからない寂しさを忘れていた。うん。やっぱりこのメンバーは最高だ。豪いなけど。

でも、その日の夜に、また若葉と遊んだ時のことや、観覧車の中でのぬくもりを思い出しては、寂しくなってしまった。

・・・・・・・・・

キーンゴーンカーンゴーン

・・・・

この土日は、あの子のことばっかり考えてた。もちろん若葉のことだ。そんな感じでけだるいけど、今日からまた学校だ。ここは俺達の学校。時下中学校だ。中学校とか言わてるけど、隣に高校があつて、希望者はエスカレーター方式で行ける。→高校付属といった感じの所かも・・・・よくわからない。

そして、この学校の隣には、非常に大きい時計台がある。遠くからでもうちの学校だつてすぐ分かるぐらいの大きさだ。ちなみにこの時計台がチャイムを鳴らしている。時計台に見下ろされてるから時下学校だ。校長曰く。

いつもどおり授業が始まった。しかし、どうもいかん。あの修学旅行で起こった不思議な出来事？を思い出すとどうしてもボーッとしてしまう。

俺 「ハア・・・・」

キーンゴーンカーンゴーン

授業の内容があまりわからないまま1時間目が終わった。

豪 「何ボーッとしたりニヤニヤしたりしてんだよ?」

俺 「ん?・・・いや、ちょっとね。」

後ろの席の豪に心配された。俺つてば重症？

そして、2時間目に入った。やっぱり頭の中はあのことを考えていた。

どう考へてもおかしいような気がする。本当に初対面のかすら疑わしい・・・まさか、前に会ったことが?いや、記憶にないし。そんなことを考えていた矢先のことだった。

？？？ 「くおらーーー佐野オ！なんばヨソ見しあつとかおめえは
つ！」

ハツ！

前を向くと田の前にチョークが飛んできていた。

ポコーン

俺 「いでえつ！」

快音と同時に俺のデコに痛みが走った。

クラスメイト 「クスクス・・・」

恥ずかしつ！数学の時間だったのを忘れてた。鬼教師 「津田 宏^{つだ ひろし}」の授業だつた。この教師、生徒が喋つていたりヨソ見をしたりしていると、すぐにチョークを投げる。しかも百発百中だつたりする。去年の先輩達の話によるといくつか技を持っているらしい。

一・「ニユーチョーク」 新品の使っていないチョークを投げる。もろさがないので痛さが倍。

二・「カツティングダブルチョーク」 多人数でおしゃべりをしている生徒に向けて投げる。机の角などにあてて、割つたチョークが全員のもとへ飛んでいく。三角関数やらなんだかんだで計算しているらしい。

三・「奥義・バーニングチョーク」 チョークが火をふく。そして爆発する。

四・「奥義・津田スペシャル」 説教。

ほんまかいな・・・
とか考えているうちに

津田「コリヤー！ボーッとするな言つとるつがつーーー
またチョークを投げてきた。

しかしつ！同じ技に1日に2度も引っかかる俺ではない。サッとよけてやつた。

生徒たち 「オー！」

生徒たちから歓声が起こつた。次の瞬間

スカーン

またもや快音と同時に後頭部に痛みが走つた。後ろの席の豪の筆箱にあてて、俺の頭に当たつたみたいだ。カツティングダブルチョーグだつた。痛い。あれ？ そりいえばもう1個の割れたチョークはどこに？・・・

居眠りをしていた豪の鼻の穴に刺さつていた。

豪 「zzzzz・・・フゴッ・・・zzzz」

おお、まだ寝てる。

クラスメイト 「ブツ！ クスクス・・・」

津田 T 「次はコンパス投げるかいなー！」

！？

そんなこんなで、午前中は終わつた。

やつと昼食だ。いつもどおり6人で食べる。

晴 「今日も真琴の弁当は美味しいそうだね~」

真琴 「へへ サンキュー」

真琴の家族は、父親と弟だけだから、昼ごはんは真琴と弟で交互で作っている。だから真琴は料理がうまい。今日の弁当もタコさんウインナーやら卵焼きやらいろいろ入ってて盛りだ。

俺 「真琴が作ったんだろう?」

真琴 「そうだよー!」

やつぱり。弟はウインナーをタコさんごにしないもんな。

豪 「そのベーコン巻き食つていいか??」

と言いつつも手に取っている豪。

真琴 「いいよ・・・・・つて・・・あつ・・・・・」

一同 「あ

豪 「ムグムグ・・・・じうひた?」

一同 「・・・・」

今、ベーコン巻きにて、緑色の仕切りがついてたような。あの海苔みたいになやつ。

豪 「ゴクン。ん、なんか今日は歯いたえがあつたな。」

やつぱり!?

未来矢 「食べちゃつたよ・・・・」

未早矢 「この間はツマヨウジまで食べてたけどね。」

未早矢がボソッと呟いた。うーん、危ないやつ。しかし、ここにちらと楽しく喋つてると俺の悩みも吹っ飛びそうだ。

そして、昼休みも終わって午後の授業に入った。

今日の午後の最初の授業は体育だった。男子は野球。女子は体育館

でバレー。面倒くさいけど、エスケープするわけにもいかないの俺は滅多にボールが来ない外野で守っていた。そこでまた、若葉のことを考えていた。考えるというより、何なんかがわからぬでボーッとしてる感じ。そして1回オモテ。いきなり内野陣のエラーでノーアウト満塁らしい。なんか打席から豪の声が聞こえるな・・・どうでもいいか。俺はまたボーッとしていた。

ガキーン！

豪 「叶汰！あぶねえ！」

俺 「ん？」

顔をあげると、目の前に何かがあった。丸いな、回転してるな、縫い目があるな・・・

！――！

「ゴッ！」という鈍い音とともに、俺の意識は遠のいていった。

・・・・・・・・・・・・

どこだつけ？ここ？・・・

ああ、この感じは夢かな？心地いいって言うか暖かいって言うか。しかし、妙にリアルな夢だ、耳もしつかり聞こえるし、目もしつかり見える。まるで、本当にそこにいるみたいだ。

ここは・・・病室かな？見たところ、人の気配はあまりない。視点を横に移すとその病室のベッドに1人の女の子が座つて外を見ていた。

俺 「あ・・・ああ・・・うそだろ。」

俺 「若葉ッ！」

しかし、やつぱり夢らしく、俺の声は聞こえてないみたいだ。なんでだ？あの日、あそこにいた若葉が何で病室にいる？それより、なんなんだこの夢は？

俺が夢の中でパニックになりかけた時、一人の小さい男の子が病室に入ってきた。

男の子 「おねえちゃん、僕とあそんでよ」
若葉 「・・・え？」

若葉は不思議な表情をしていた。

若葉 「ごめんな。お姉ちゃん、あんまり目が見えないから遊んであげられないよ。」

ふと、男の子がこっちをむいて顔が見えた。どこかで見たような顔だ・・・

男の子 「いいよー。お話とか聞かせてよー」
若葉 「え？ そんなのじゃつまらなくない？」

男の子 「つまらなくなんかないよ！ たくさん聞かせて？」
若葉 「わかったよ。君の名前は？」

男の子 「名前？ ・・・・わからぬ。」

わからない？ 本当にこの夢はなんなんだ？ 妙にリアルだ。そこに見えているのは確かにあの時一緒に過ごした若葉だ。

若葉 「クスッ・・・面白い子」

男の子 「はやくー」

若葉 「うん。じゃあまずは私の小さい時の話をしあげる。ちようど、君ぐらこの年の頃の話だよ？」

・・・ピッ・・・ピシッ 。

あ・・・景色が・・・歪んで・・・
音も何も聞こえなく・・・
・・・・・・・・・・・・
・・・

？？？ 「叶汰あああああッ！」

誰だ？何でそんな大声でおれの名前を？
目を開けると、そこには・・・

俺 「つ！」

男泣きをされている豪さんがおりました。

豪 「良かったっ！俺のボールが当たって死んだかと思ったー」「め
んよ～！ウウウ・・・」

俺 「いや、別にいいけどさ・・・人の顔の上で泣かないでくれ・・

・」

ああ、もう・・・

結局その日は、保健室の先生に言われて自宅に帰ることになった。
俺は、自室のベットの上でゴロゴロしながら、今日の夢をもう一度
思い出してみた。あの夢が、現実に起こっていることだとしたら？・
・・いつたい若葉は？あの男の子は？

考えるだけで頭が痛かったので、今日はもう寝ることにした。

次の日 。

いつものように登校して、教室に入つたとたん真琴が話しかけてき
た。

真琴 「叶汰！おはよっ！大丈夫だった？」

俺 「うん、まあ、一応」

真琴 「なんか・・・元気ない？」

俺 「えっ？そ、そんなことないって・・・」

流石は真琴・・・するどい。でも、真琴ならなんかわかつてくれそ

うな気がする。

俺 「・・・ 実は ・・ 信じられないかもしけないけど
キーンコーンカーンコーン

俺が話そうと思った瞬間にチャイムが鳴った。

俺 「わりい。2時間目の長い休み時間に！」

真琴 「う、うん。わかった！屋上でいいかな？」

そして、長い長い国語の時間が終わり・・・

俺は屋上に到着した。ちなみに、ここは、俺と真琴・・・いや、俺達と真琴がはじめて会話を交わした場所だった。

真琴 「で、なんなの？話そうとしてた」とつて・・・」

俺 「うん。実は」

俺は修学旅行から今までのことを事細かに話した。真琴はしばらく考え込むような顔をして

真琴 「ありえない話じゃ・・・無い・・・よね？」

俺 「何が？」

真琴 「そのー・・・叶汰の夢が現実だつたってこと。私たちの修学旅行が終わつて土日の間に怪我して入院したつてことも考えられるしさ」

俺 「確かに。でも・・・」

目が見えないと言つてたような気がする。俺は言おうと思つたがこれ以上真琴に考えさせるのも悪いと思つて言葉を飲み込んだ。

真琴 「でも？」

俺 「いや、そんなことが本当にあるのかな?と思つてさ。夢で現実世界のことを見るなんて」

真琴 「あるひつ 不思議なことってのは僕たちの年代にはつきものだよ!」

二口二口しながら言われたからか、妙に納得してしまつた。

俺 「だな！がんばつて手掛かりとか探してみるよつ！」

真琴 「うん。頑張つて。・・そのー・・いつでも相談してね。

力になれることがあればできる限りでやるから。」

俺 「ああ。ありがとう」

そんな感じで、真琴への相談は終了した。そして、今の相談をきっかけにして、俺は夢の手がかりを探してみることにした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5226d/>

モラトリアム～未熟な感情の中学生達～

2011年1月18日15時42分発行